

銀杏

発行所

〒792-0835

新居浜市山根町8番1号

曹洞宗瑞應寺専門僧堂

編集発行人 村上 徳 存

電話(0897)41-6563

FAX(0897)40-3127

毎月1日発行

(振替 01330-2-31918)

瑞 應 寺

印刷所 東田印刷株式会社

コロナ禍中——行持——

守塔 村上 徳 存

コロナ禍中で緊急事態宣言が延長して、ウイルスまん延防止の為、又もや、自宅待機、三密を避け、お盆の帰省、大人数の会食を止めて自粛、他府県への移動も制限をせられた。従って山内の行持も制約せられ縮小せざるを得ない状態である。

中国、唐の時代に、禪宗に五家(潯仰宗・臨済宗・曹洞宗・雲門宗・法眼宗)が成立し盛えた時代である。

中国曹洞宗の開祖とされる、洞山大師、良价和尚(八〇七〜八六九)の孫に当る護国守

澄和尚(生没年不詳)、浄果大師と諡号される。

「護国三懺」という話が残されている。僧の間に、三度懺(恥辱の意)と答えたことに基づく話である。

第一問

「僧、護国に問う、鶴、枯松に立つ時如何。」

立派な鶴が飛んできて、枯れた松の木に立っているのは如何でしょうか。修行僧は僧堂に安居して、毎日の行持に明け暮れている、毎日坐禅して、悟りを求めて、遂に悟りを開いて百尺竿頭に迄きまし

たが如何でしょうかと問いかけているのである。

「国云く、地下底一場の懺。」

護国禪師は、答えて、下から見上げると、百尺竿頭に住著すると已到住著の病にかかつている。却來の法がなければならぬ。これも一つの恥さらしだと答えた。

第二問

「僧云く、滴水滴凍の時如何。」

法身法性で、一滴一滴落ちては凍っていく。一滴一滴の水が凍って内外玲瓏で立派なことでありますが如何でしょうか。

「国云く、日出でて後一場の懺。」

そのようなことは、太陽が出てくることその光によって溶けてしまっではないか、法身法性というも、法身法性は修行しないそのままが悟りだと思つと駄目である。これも一場の恥さらしだ。

第三問

「僧云く、会昌沙汰の時、

護法善神甚麼の処に向かつて去るや。」

会昌というのは、中国の年号のことで会昌の時代には、三武一宗の法難がありました。その時護法の善神は何処に居られたのでしょうか。という問いである。

中国では、仏教が入ってきた、歴史も長く、国土も広大であるから、その間に、仏教が発展、制御不能と、道教、儒教の軋轢等により、「三武一宗法難」北魏の太武帝(四四六)北周の武帝(五七四)唐の武宗(八四三)後周の世宗(九五五)の法難をいう。三武一宗の法難、廃仏が行われた。会昌は唐の時代の廃仏を言う。その時、護法善神は何処に居られたのでしょうか。

「国云く、三門の両箇、一場の懺。」

護国和尚は答えて、三門に立つて居た二人の仁王が恥さらしだ。

これは惜事門ということの一つの事柄を惜りて、仏性の真実を言っているのであって、人々

の心の中に仏性を護持する道心が欠けていることを言う。

如上の本則に対して、宏智禪師は頌古して、

「壯士稜々鬢未秋

男児不憤不封候

翻思清白伝家客

洗耳溪頭不飲牛」

護国和尚のところへ勢いよく問答をかけてきた若者は若い。又若い頃に奮発、努力してくれねばならぬ。

我宗は清白伝家の家風である。古人の家風を守って「鶴古松に立つ」空見識も立てることではなく道心を持つて正念相続が大切であることを説く。

修証義に

「我等が行持に依りて諸佛の行持見成し、諸佛の大道通達するなり」

コロナ対策として、緊急事態宣言発令中でありウイルス拡大防止の為、自粛等要請されている。今日、出家以来護法神、守道上に守られている。行持を勤めたいと祈願している。

合掌祈祷

私の仏教 — 経年劣化 —

文学博士
田島 毓堂

新築の家は気持ちがよい。杉や檜の香り一杯なら申し分ない。家に限らず、車にしろ、電化製品にしろ、更にいろいろな道具類も総じて新しい物はいい。そして、大抵は、物にも依るが、十年間くらいは悪くならないし、故障も余りしない。

食べ物なども、中には年代物が珍重される物もあるけれども、多くは新しい物、いわゆる新鮮な物が喜ばれる。最近、賞味期限云々がよく問題にされ、大量廃棄に人の目がかかるはなっているが、これも、新しい物を好むからだろう。

人間も古くなるといういろいろな故障が出てくる。ただ、徒然草に言うとおり、人ほど長持ちする物はあんまりない。徒然草の頃と今では人の平均寿命は全然違う。当時でも、長寿の人は、例えば藤原定家のお父さん、藤原俊成は相当長命で、九十の賀を行い、定家も、その子の為家も八十近くまで長寿を保った。兼好にしろ、四十路に足らぬ程にて死なんこそめやすべけれ、などと言っているが、かなりの長寿だった。正確な没年は分からないが、七十そこそこまでは消息が分かる。医療が今ほど発達していなかった頃に、その年齢の人は、本当に健康だったのだと思う。今の

医療は、若年で死ぬと言うことを防ぎ、平均寿命を高めているが、人間の寿命そのものを延ばしているわけではなさそうである。一説では、人間の寿命は昔から、百二十歳くらいと言われている。

それはともかくとして、私は昨年満八十歳を超えた。昨年暮れの頃から、以前何回か経験したことのあるいわゆる五十肩の症状、放って置いたわけではなく、治療はして貰っていた。ところが、先月末頃から、肩から、腕にかけて痛む。勧められて整形外科に行った。レントゲンでは年相応とのこと。痛み止めの貼り薬を貰った。全然良くならない。そして、MRI検査をせよと言われて、病院を紹介された。改めて診察があり、お医者さん曰く、八十歳ならこんなものでしょうとのこと、念のため、検査はするが、多分同じだろうと。まさに、体の経年劣化、じたばたしたところで何とも成らない、仕方ないと諦める他なさそうである。



三才図絵 蘇軾

テレホン法話 〇八九七四一〇〇三三
禅のたより◆自分を磨いて
人に感動を

私はつい先日知ったばかりのですが、佐賀県佐賀市の海苔漁師さんで大変に努力してピアノを弾けるようになった方がおられるそうです。皆さんはご存じでしょうか？

その方のお名前は、徳永義昭さん。佐賀県佐賀市の海苔漁師さんで、かつてはパチンコが大好きな方だったのだそうです。しかし、その大好きなパチンコで大金を使ってしまった、とても落ち込んでいた時に、テレビでフジコヘミングという方が弾く、ラ・カンパネラというピアノ曲に出会いました。

徳永さんは、その演奏にたいそう感動して「自分でも弾いてみたい」と一念発起。それまで触ったことも無いピアノに五十二才から挑戦して、毎日何時間も練習した結果、なんと次の年には弾けるようになり、今では演奏会に呼ばれるほどの腕前になりました。

この徳永さんの挑戦が多くの方に希望と力を与えているそう

で、私も、すごいなあ、人間、夢中になればすごいことができるものだなあ、と感じ入りました。

徳永さんは「演奏会では失敗やミスが多い。それでも、皆さんに喜んでもらえる嬉しいし励みになる」と言っておられます。

私はこの、徳永さんの姿をみたとき『自未得度先度他』という、仏教の教えを思い起しました。

『自未得度先度他』…自分が救われていなくても他の人を先に苦しみから救おう、という仏教の実践項目の一つです。

ご自身の挫折が出发点ではありましたが、徳永さんはラ・カンパネラという曲に出会って行いを改め、夢中になって練習に打ち込みました。そして、乞われて出向く演奏会では、たとえ完全でなくとも来場した方々に喜んでもらおうと真摯にピアノに向かっています。その姿は自然のうちに『自未得度先度他』の教えと同じ姿となっているのではないかと思うのです。

徳永さんは「演奏会で上手く弾けずに落ち込んだ時、必ず応援のメッセージが来た、だから頑張れる」と言っておられます。『自未得度先度他』の「自分」と「他の人」が感動という力で互いに支え合い、一つになっているのだと思います。自分を磨き続けることによって、多くの方との心の通い合いに至るというのは、本当に素晴らしいことですね。

もちろん徳永さんはピアノでなくても、元々作っておられた海苔でも、多くの方に幸福を届けておられたことでありましょう。しかし、夢中になって打ち込んだピアノによって、多くの方との心の通い合いが顕れたのです。感動から自分を磨き、多くの方に感動を運び、その感動がまた自分に返ってくる。本当に素晴らしい感動の連鎖ではないでしょうか。

コロナ禍で、何かと気持ちがふさがちになる毎日ですが、私たちも自分を磨き続けることで、徳永さんのように周りの方々を明るくしていきたいものですね。

徳島県城崎町 田村航也師
令和三年七月十一日〜二十日

◆広い視野をもつ

皆さん、禅寺で坐禅をされたことはありますか？体験したことのある方は、坐禅をどう感じられたでしょうか？

以前、子供さんたちがお寺体験をする『子供坐禅会』を開いた時のことです。坐禅が終わった後に、一人の男の子が「あー、気持ち良かったー」と大きな声をあげました。その男の子は、坐禅をしている最中も落ち着いた様子でほとんど動かずに坐っていたので、「坐禅の時、どんな感じだったかな？」と訊いてみました。

すると、「とつても広がった！遠くで鳥の声も聞こえた」という答えでした。

坐禅時には目を普通に開いて坐るのですが、曹洞宗の坐禅は壁と向き合って坐るので、前が塞がれて窮屈な感じを持たれる方もおられるようです。そのため、「どこを見れば良いのですか」という質問を受けることがあります。

そんなときに私は「目に入るものをありのままに、そのまま受け入れます。一点に集中しないで、見える範囲全部を見てください」と説明しています。

私たちは普段、どうしても何かを見ようとします。欲しいものを見ていたり、見たいものだけを見つめていたり。その時には、欲しいもの、見たいものの以外のものは、目には見えてい

のに、無意識のうちに捨ててしまっているのです。「目に入るものをありのままに受け入れる」というのは、捨ててしまっているものをもう一度、取り戻そうということなのです。

「とつても広がったー遠くで鳥の声も聞こえた」という男の子の言葉は、五感で感じたことをありのままに受け入れたからこそその感想だということですね。

仏教では、欲しいものや手に入れたいものがあるとき、そしてそれが手に入らないときの欲望は、炎のように燃え盛って、私たちに迫って来て、苦しみの元になると教えています。この、心に迫る欲望の炎が消えて静かに安らぐ境地を、涅槃寂靜（ねはんじやくじやう）といいます。

涅槃寂靜、なかなか難しいですが、姿勢を調え、息を調えて、心静かに坐る坐禅が、良い入口になるはず。苦しさを感じた時、禅寺を訪ねてみませんか？ほんの少し立ち止まって、一息つく時間を持ちましょう。周りをゆつくり見渡せば、それまで目に入ってきたものが減って、空は何色ですか？雲はどんな形をしていますか？ゆつたりした時間を持てば、自分がどれほど狭い中で右

往左往右していたかに気が付き、広々とした世界が、目の前に戻ってきます。広い視野を持つて、毎日を過ごして参りましょう。

徳島県 城満寺 田村航也師
令和三年七月二十一日（三十日）

◆ 如来応量器

「応量器」とは、禅宗の修行僧が使用する個人の食器のこと。仏（如来）さま以来お袈裟と共に出家者が常に所持する大事なものです。修行道場では今も毎日の食事のとき、お釈迦さまの一代をふりかえりながら展鉢（てんぱつ）の偈（ぎ）をと念えています。「仏生迦毘羅（ぶつしょうかひら）、成道摩揭陀（せうどうまかだ）、説法波羅奈（せっぽうはらな）、入滅拘絺羅（にゅうめつくしら）、如来應量器（にょらいおうりやうき）、我今得敷展（われこんとくふけん）、願共一切衆（がんぐいっしやうしゆ）、等三輪空寂（とうさんりんくうじやく）」。仏は迦毘羅に生まれ、道を摩揭陀に成じ、法を波羅奈に説き、拘絺羅に入滅したもう。如来の応量器を我れ今、敷展することを得たり、願わくは一切衆と共に、等しく三輪を空寂ならしめん」と。

このように如来から受け継がてきた応量器は仏さまの弟子として生きる我ら出家者を象徴するものの一つです。その象徴にはさまざまな意味があると思いますが、今回「応量器」という名を「まさにはかるべきうつわ」と

読むことで、もっと深い実践的な意味を表したいと思います。

五観の偈に、「二つには、功の多少をはかり彼の来処をはかる（感謝）。二つには、おのれが徳行の全欠を」とはかつて供に必ず（反省）。三つには、心をふせぎ過をはなれることは貪等を宗とす（修養）。四つには、まさに良薬をこととするは、形枯を療せんがためなり（目的）。五つには、成道のためのゆえに、いまこの食をうく（念願）」と、示されたように「応量器」には、そのうつわのなかに入っているもの、すなわち供養のもの・供養をする人・供養をうける自分など、まさに量るべきものがあります。

このうつわをさらに広げると、自分のこころ自分のからだ所縁たる対象など、日常生活のすべてのことに応用することができ。例えば、私は僧堂で典座（食事係）の仕事を経験して来ましたが、そのうち身につけた業、すなわち「三つ（時・量・味）の量ること」を紹介したいと思います。

まず「時をはかる」ことです。僧堂は共同生活をしていて一日の差定が決まっています。食事をすることも修行の一つであり、食事を準備する人も時間を守るのがまず大事です。一分一秒も

遅れては皆の時間を奪う事になります。

次は「量をはかる」ことです。お寺の食事は毎回数人数が変わります。山内の修行僧の他にも役寮や参禅者またはお檀家様などの出入りがありますので、その度人数を確認し食事の分量を量るのが大事なことです。食べ物が足りないといふ寂しくなるし、余っても大事な供養物を捨てる事になります。量をはかることで食材を無駄なく使う事ができます。

最後に「味をはかる」ことです。この味は美味しいものとか好きなものとか味覚を喜ばせる欲望の味でもなく、また厭立が決まっているマニュアル的な味でもありません。限られた時間に、その時の在庫の素材を如何に使うかによって毎度違う味が生まれます。まさに一期一会のうまい味です。この味は「時」と「量」とをはかる毎日の実践によって現われた「味」です。まさに今を生きる（はかる）如来の智慧（うつわ）です。その智慧を「如来」は、今日も「応量器（まさにはかるべきうつわ）」と、我らに聞かせてくれているのではないのでしょうか。

瑞應寺専門僧堂蔵司 金範松
令和三年八月二十日



■筆供養・弁天大祭

七月廿六日（旧暦六月十七日）に毎年恒例の筆供養・弁天大祭が行われた。



弁天大祭

■大施食会

八月二日、大施食会が山内大衆合山にて厳修された。導師は、村上山主が務められた。



大施食会

■夏安居解制

五月に入制以来、三ヶ月。首座を中心に、弁道精進を続けた夏安居は、八月九日の楞嚴会満散・土地堂念誦、十日の小参・人事行札等の諸行事を勤め、無事解制となった。



土地堂念誦

白眉殿進捗状況

写真の通り工事が進んでおります。



弁天池改修工事

八月の日鑑

一日	祝禱
四日	日曜参禅会
九日	住友展墓
十五日	楞嚴会満散
廿一日	土地堂念誦
廿六日	小参・人事行札
廿七日	祝禱・略布薩
廿八日	水施食
廿九日	観音講・勉強会
三十日	白眉殿地鎮祭
三十一日	僧堂視察
略布薩	

九月の予定

一日	祝禱
七日	参玄会（九日迄）
十日	開山忌報恩托鉢（十七日迄）
十五日	祝禱・略布薩
十八日	観音講・勉強会
廿一日	開山忌速夜
廿二日	開山忌正当
廿三日	寶篋印塔供養
廿八日	自彊舎益友会秋季法要
廿九日	両祖忌速夜
三十日	両祖忌正当
略布薩	

銀杏感謝録

栃木県	長泉寺 殿
埼玉県	永福寺 殿
埼玉県	伝福寺 殿
埼玉県	慶寿院 殿
岡山県	洞松寺 殿
愛媛県	梶原恵都子殿
長崎県	西方寺 殿
東京都	片上学 殿
愛媛県	宮崎芳久殿
愛媛県	鴻上諄二郎殿
静岡県	志太保江 殿
長崎県	宝泉寺 殿
高知県	五松寺 殿
広島県	広福寺 殿

（令和三年六月廿五日受付迄）



鐘 声

東司の掃除をしておりますと、汚れているな。嫌だなと思つて始める事が多々ありましたが、仏法では、淨穢不二といひまして元来、綺麗だとか、汚いとかいう事はないといつております。

人間の分別の知恵は、気に入つたものは取り込み、気に入らんものは捨てようとする、これは得手勝手なのです。仏様は清淨という事は別の事をいうのではないのです。泥沼の中で、蓮は育つ。綺麗な丘の上や、綺麗事で清淨という事ができるのではないのです。別の世界のものではない。そういう事をはつきりさせていかなければなりません。東司の掃除を一つとっても修行の難しさを痛感しました。日々精進していきたいと思ひます。

（副堂道喜）